

## 横山正著 『浄瑠璃操芝居の研究』

橘, 英哲

<https://doi.org/10.15017/12285>

---

出版情報：語文研究. 17, pp.64-67, 1964-03-31. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

る。正しい結論である。

万葉集の枕詞「蔽零」「丸雪降」はアラレフリかアラレフルか  
これは万葉集三八五・一一七四・二七二九番の「蔽零」と一二九  
三番の「丸雪降」についての訓を考察したものである。上代東国方  
言の語法に徴して、三八五番と二七二九番の「蔽零」はアラレフルが  
妥当で、一一七四番の「蔽零」と一二九三番の「丸雪降」はアラレ  
フリともアラレフルとも訓むことができ、いずれとも決定すること  
は困難であると結論されている。

以上で、本書についての簡単な紹介を終ることにするが、本書の  
十三篇を通して言えることは、すべて実証性に貫かれ、後学の範と  
するところである。恰も魚の鱗一枚一枚が舟念に正確に描かれてい  
るが如く、一見、一筆でさらりと書かれているように見える部分で  
も、水中におよぐ魚のように、一枚一枚の鱗は魚の動きにつれて波  
間にきらめくが如くである。しかし、論文の真意をくみとれず、か  
かる微妙な論のはしほしまでの紹介には舌たらずの点が多い。特に  
紙教の関係もあって、終りになって更に簡単にしたため、少なから  
ず読者をして誤解させるのではないかと偏見に恐れる。自分自身の  
目で一読し、確かめていただきたいと願うこと切である。しかも、  
忽卒の中に筆を執ったため、見おとしや言いつくせなかつた点、徒  
らに妄言を重ねた点も多いと思う。先生の御寛恕をお願いして筆を  
擱くことにする。なお、校正の不備が目立つが、索引と校正の不備  
は一に我々の責任である。(昭和三十九年二月二十日、南雲堂桜楓  
社刊。A5判、三九七頁、二四〇〇円。)

## 横山 正著 『浄瑠璃操芝居の研究』

橘 英 哲

この度、「浄瑠璃操芝居の研究」と題された横山氏の著書が刊行  
された。総七八一頁、氏の積年の御研究の成果が、一挙に花咲いた  
感のする一書である。

内容には、もちろん以前から発表されて来たものも多く、私など  
にもなじみの論が少なくない。しかし、それらもこの書の副題に、  
「浄瑠璃の近世的性格を中心として」とあるように、「浄瑠璃の近  
世演劇的性格の形成・発展・消長等の展開の姿を眺めようとする」  
(緒言)意図の下に再編成されている。そうした視点に立って、第  
一章「浄瑠璃本」よりはじまり、第五章「芸論」に終るその内容は  
「浄瑠璃作品の内容並びに表現形式から、及びその浄瑠璃を現在に  
伝える丸本の当時に於ける刊行事情と形式から、更に又、作者や浄  
瑠璃の音声的演奏者たる大夫の意識と観客の批判から、浄瑠璃特有  
の演劇的性格」(緒言)を見事にとらえているのである。

このようにみると、この書の紹介はどうして私などの任ではな  
い。しかし、編集部のお勧めもあり、かつ微々たる歩みながらも後  
に続きたいと願っている後輩として、あえてその榮になつたわけ

である。的はずれのものになりかねないが、氏の御寛恕を願うしただである。

さて、この書は非常に大部なものであり、限られた紙数では内容の二々の要約は困難なので、適当に粗密の差をつけさせていただくことにする。まず第一章「浄瑠璃本」では、近松以前、近松時代、近松以後と分け、近松時代には海音も含めて、主として丸本の奥書の識語の分類により、当時の丸本出版界の動勢を探り、そこから、作品に對する太夫の意識の展開を見ようとする。特に近松の場合、義太夫の明確な近世的意識への展開がみられ、海音については同様に、上野少掾に清新な近世的意識の昂揚がみられるという。又、山本版を代表とする偽版の横行については、そうした偽版を支えた時代の背景を、近世商業資本の丸本刊行界における飛躍とし、そのよくな近世的性格の消長の頂点を、元禄から享保にかけての頃であるとして、この章を終っている。奥書の識語の分類によるこのような研究は、従来全くなされていなかったものであり、丸本の書誌的研究の一面へ、一条のスポットライトがあたつた感がある。

第二章は、近松作品の本文批判の問題である。これは語り物としての浄瑠璃の立場から、太夫を中心とした本文批判のことであり、第一章に詳細であつた奥書の識語その他の資料から、作品に對する太夫の意識をながめ、近松の浄瑠璃丸本において、原作を忠実に伝えていけるのは、政太夫本であり、次が義太夫本、加賀掾本は最下位にあるとされる。

第三章「浄瑠璃の文体」は、「浄瑠璃の序詞」「浄瑠璃の道行」「浄瑠璃の二三の修辭」の各節にわかれ、それぞれに資料の十分な

用意がなされていくわしい。そのうち、私個人にとつては、特に第二節の道行が興味深かつた。文学として表現された道行のあとをたどることは、普通にはそう困難なことではない。古代からの道行文の、史的展開の単なるあとづけなら、すでになされつくされているといつて良い。しかし、その道行文が浄瑠璃の中に現われ、しかも、浄瑠璃に欠くことのできない要素として、以後の浄瑠璃中に消長してゆくこととなつた過程も、又その理由も、いまだ十分に研究されつくしたとはいえないと思ふ。その過程の中に近松があつたのはたしかなことだとしても、近松の功績が何であつたのか、明快に示してくれる答はなかつたのである。そういう意味で、氏のこの論はその答でもあり、又、浄瑠璃における道行研究の今後の目標であるともいえよう。

まず、浄瑠璃という劇的構成の中で占める道行の位置について、特に世話物道行、それも心中物に劇的構成機能が顕著であるが、時代物には、「劇的趣向の挿入」がみられるという点で、「近世演劇としての発展の一段階」が示されているといわれる。その世話物道行に顕著な劇的構成機能とは、「道行以前の叙事的、劇的事件の進行変展のすべてを、道行に於いて、抒情的、詩的、音曲的に回顧、述懐、集約することによって再確認し、道行以前の演劇的世界を道行に於いて感情的に裏附けし、次に来る破局の意義を把握し、破局突入への感情的準備と整理とを行なうことによつて、道行を一曲全体と密接に關係づける道行の機能」(P288)のことなのであるが、それが、「近世的色彩を濃厚に持つ心中(情死)、或はそれに類似した封建的死を予想する場合に、特に成立した」(P286)といふ点

に、「近世特有の劇構成形式の性格（近世劇の特性）」が認められるというのである。次に道行の詞章の表現の面で、道行文における歌謡引用の方法、移動感表現の方法に、従来にない新しい手法が見出され、「浄瑠璃道行に於ける修辭の一つの近世的完成」が近松において果されたのだとされる。以上は主として、作者たる近松の技倆にあずかることの大きい点に關するものであるが、次にそうした作者の技倆を支える「作者・太夫の道行に対する意識と態度」に言及する。このうち、作者近松の道行に対する考えは、例の「虚実皮膜論」にあきらかであり、「十分な生の躍動を構成し、それによって淨瑠璃一曲全体に於ける劇的地位の確立、浄瑠璃の演劇性の完成を期待したものと考えられる」(P.315)といわれるが、太夫については、加賀掾・義太夫・政太夫の、それぞれ「紫竹集序」・「貞享四年義太夫段物集序」・「音曲口伝書」などに、道行に対する太夫としての態度が示されていて、結局この三人の道行表現上の芸風の相違は、「専実＋抒情的美化（加賀掾）」「専実＋抒情的美化＋写実化（義太夫）」「専実＋抒情的美化＋写実化の強化（政太夫）」(P.319)の關係であり、前述の道行の表現技法の進展は、単に近松の創作の進展のみではなく、背後にこのような太夫の意識、態度の支えがあったからだとされるのである。道行という、一曲の浄瑠璃中でも特に舞台的な、つまり単なる詞章の読みだけでは、どうも偏頗なものにならざるを得ない部分を、このようにあくまでも、演劇として総合的に考察する姿勢の正しさを知らされるのである。道行のみならず、各論において著者のこの態度は一貫してみられるが、それが当然なのだと思います、私などにはとうていそのとおりにはゆかない

いむずかしさを、演劇研究は持つていようである。

第四章にうつる。「浄瑠璃に於ける趣向と描写の問題」と題されたこの章は、浄瑠璃があくまで聞き流されてしまふ音曲であり、舞台の対象が人形であることから考えられる「表現の外面的形式」の推移、つまり、「趣向・描写の様式的変化」を中心にしたものである。第一節では「世話浄瑠璃の發生に至る初期浄瑠璃の近世的展開の様相と意義」を、愛欲的趣向を中心として考察され、続いて第二節と第三節で、近松の時代物について、それぞれの近世的性格成立への展開を追跡されている。まず時代物では、時代物中最も世話的な、いわゆる時代世話物と、逆に最も世話的ではないと考えられる曾我物とにわけ、それぞれに特有の表現形式を詳細に分析し、さらにそれらを綜合して、時代物全体についてその近世的性格の展開を次のように区分される。

胎動期 世継曾我 用明天皇職人鑑

展開期 用明天皇職人鑑 傾城吉岡染

達成期 傾城吉岡染 曾我会稽山

円熟期 曾我会稽山 歿

次に世話物では、近松の世話物を、心中・姦通・犯罪・假構の四群に分類し、それぞれについてその群に特徴的な構成、趣向、表現形式を分析する。そして時代物と同様その展開の様相を区分し、宝永四、五年までの第一期、享保初年までの第二期、以後の第三期とされる。そして、時代物、世話物の進展の経過を合せると、完全にいくちがっており一致点を見出せないが、これは、非近世的なものから近世的なものへと進んだ時代物と、すでに近世化したものが更

に高次の近世的性格へと進んだ世話物との、本質的なものの差であるとしておられる。次に近松歿後の後期浄瑠璃が、「具体的にいかなる変化をし、また浄瑠璃と太夫・人形などの舞台との関係がどのような推移を示したか」などについて考察されるが、そのⅠの享保・元文・寛保期には代表作者として文耕堂があげられている。そしてその作品も単に文耕堂単独作のみならず、合作物も仔細に検証してとりあげておられるが、語り手である太夫との関係、さらにはその作品にみられる趣向の型などから決定され、文耕堂の作風を検討されている。合作物についてのこのような推論は、私には一見不可能のようにさえみえるのであるが、その推論の過程は明快である。そして、この期の浄瑠璃は、「武士的道義の讚美、武士的義理への人情の奉仕的傾向」を根本理念とし、したがって近松時代にくらべて、その近世的性格に変質を来たしているといわれる。Ⅱの

延享以後は、各作品について時代の傾向をながめ、この期のものは舞台、太夫の芸中心に見るべきものとなり、「近世芸能としての自主的価値と意義とを失うに至る」と結ばれている。第四章における以上のような考察は、やや表面的な感がないでもない。しかし、氏御自身いわれているように、浄瑠璃があくまで舞台にかけられる演劇であるということをお忘れなかり、このような基礎的事項の表現の究明は、当然なざればならぬものである。まさに、この段階を不満とするほどには、この面での浄瑠璃研究は進んでいないのである。

第五章「芸論」は、太夫芸論、作者芸論、操り評判記、稽古手引書の四節にわかれ、それぞれに深い考察がなされている。内容のいくつかの紹介は省かせていただが、これらから結論として、延宝から天保にかけての浄瑠璃全盛時代を、延宝・寛保の本質形成時代、延

享・天明の技巧展開時代、天明・天保の古典化流行時代の三期にわけておられる。その第一期は、作者、太夫、座本などの操り芝居の提供者の側に発展の中心があつた時代であり、第二期は、作品よりも音曲の方に重点が移つた音曲的技巧展開の時代であり、そして第三期は、操り芝居そのものは古典化、固定化し、かわつて素人浄瑠璃が流行した時代であつたといふのである。

最後に、以上の各方面の年代的展開を要約し、元禄末年、宝永中頃、享保前半、寛保、延享の各時期が、各種の転機が重複し、操り浄瑠璃史上、重要な時期であると結論して終つてゐる。

現在の浄瑠璃研究の進歩はかなりなものがあるが、ともすればそれが細かくなりすぎ、深くはあつても部分的でしかないきらいがないでもない。その是非をいうのではなく、あくまで一つの史視の裏打ちが必要ということなのだと思ふ。前述したようにこの書を中心は、浄瑠璃操り芝居における近世的なもの展開の究明である。しかもそれが、この書の標題のとおり、浄瑠璃を演劇としてみるという一貫した視点に立つてなされたものである点に意義がある。第五章においてみられた、作者、太夫の芸論はもとより、操り評判記から、又素人の稽古手引書の類から、当時の浄瑠璃操り界の様相をとらえようとされるのも、そうした姿勢の下での方法なのである。

豊富な資料による考証の確かさ(例えば第一章において、当時の丸本出版界の状態をみる際の、出版事情を物語る豊かな傍証資料による緻密な考証など)は、各論を細部にまで的確に推し進めてゆく。そしてそれを支える前述の巨視的なゆるぎない態度によつて、演劇としての浄瑠璃という複雑な対象に、実に見事に接近している書だといえよう。(昭和三十八年十二月十五日、風閣書房刊。A5判、七八一頁、四八〇〇円。)